

怒りの情動及び攻撃的行動の人格的要因に対する  
生理的喚起の影響について

大 平 英 樹

The interactive effect of physiological  
arousal and narcissistic personality  
on emotion of anger and aggressive behavior

Hideki Ōhira

An experiment was conducted to investigate the interactive effect of the physiological arousal and one of the personality factors which facilitated anger and aggression—narcissistic personality—upon the emotion of anger and verbal-aggressive behavior. 120 university students (60 male and 60 female) participated in the experiment. First the arousal level (SPR) of each subject was measured. Then subjects were presented a frustration story which contained one of four informations about the cause of frustration : frustrater's negligene, his altruistic intent, his malicious intent, or accident. Subjects were asked to infer the intensity of the victem's anger and aggression against the frustrater. Finally, Narcissistic Personality Inventory was administered to subjects.

A three-way ANOVA (arousal, narcissistic personlity, information of cause) indicated that all three independent variables and the interaction of arousal and narcissistic personality influenced the inference of anger and aggression. Subjects infered the most anger and aggression of the victem when both their arousal level and the tendencies of narcissism were high. These results were interpreted in flame of the spreading activation theory (Collins & Loftus, 1975).

Key words : physiological arousal, narcissistic personality, anger, aggressive behavior.

- 
1. 本論文は丹治哲雄, 石田英子との共同研究によって得られたデータをもとにしている。丹治が生理的指標の測定を担当し, 石田がデータの統計的分折を担当した。なお, 本研究は平成元年度文教大学人間科学部共同研究費によって行われた。
  2. 本研究のデータ分折は, 文教大学計算機センターにおいて, そこに収録されているSPSSXを用いて行った。

## 問 題

大平(1988a)は、自己愛的傾向が強い健全な個人にみられる、怒りの感情や攻撃的行動の特徴的なパターンについて検討した。その結果、自己愛的な個人は(1)自尊心の損傷や他者からの無視に対して強い怒りや攻撃を生起させやすい、(2)他者の行動の動機や事情に対する考慮に欠けており、宥和情報が攻撃を抑制する力が弱い、(3)怒りと攻撃的行動が直接的に結び付きやすい、などの傾向をみいだした。さらに、これらの傾向が臨床的文脈でいわれる「自己愛的激怒」(中西・佐方, 1986)の概念的 content と類似していることを指摘した。

このような、攻撃的行動における人格的要因はこれまでもいくつか指摘されている(例えば自己意識や自己モニタリング、権威主義的パーソナリティ、あるいはもっと一般化された概念としてのいわゆる攻撃性など)。しかしながら、こうした人格的要因がどのような仕組みでもって情動や行動に影響するのかということに関しては、ほとんど言及されていない。そこで、本研究ではそうした側面に新たな地平をきりひろくするために、人格的要因の影響のメカニズムの一端として、一般的な生理的喚起の機能に着目する。ここでは喚起を人格的傾向と情動・行動の間に介在する要因として位置づけたい、本研究は、そうした視点に対する示唆を得るために、予備的な実験的検討を行うことを目的としている。

我々は、情動を経験する際に、多くの場合生理的喚起が伴うことを実感的に知っている。特に怒りの情動の際には「かっとして頭に血がのぼる」というような自覚的反応は非常に顕著である。このため、喚起は古くから情動の構成要素として指摘されていたが、その扱いには様々な立場があった(怒りの情動と攻撃的行動における喚起の位置付けに関しては、大平(1988b)がレビューを行っている。しかし、いずれの立場においても共通している認識は、怒りという感情を経験するから、その結果として喚起が起るのではないらしいというこ

とである。古典的な「悲しいから泣くのか、泣くから悲しいのか」という命題があるが、現在では、少なくとも喚起は高次の認知的処理による情動の形成よりも先立つという見解が一般的になっている(Izard, 1982)。

こうしたことから考えて、自己愛的個人に特定の情動のパターンがあるとすれば、生理的喚起に関してもなんらかの特徴があることは推測できる。この問題に関して、Clark(1982)の認知心理学の枠組みによる説明が示唆的である。Clark(1982)は、生理的喚起は、一種の心象(imagery)として記憶に蓄えられ、各々の情動スキーマと連合していると仮定した。喚起心象の活性化は、活性化拡散(Collins & Loftus, 1975)の働きにより、連合している他の心象、すなわち情動的思考、表出—運動などの心象をも活性化することになる。このような過程を通じて全体的な情動体験が強化されると論じた。

自己愛的個人は、通常の個人が怒りをさほど感じないような状況でも、怒りを経験する傾向がある。そのような場合も、当然生理的喚起が伴って経験されていると考えられよう。そのため、そうした状況の心象と喚起の心象(および他の怒りの心象)の間に比較的強い連合が形成されていると考えられる。この結果、外的刺激、気温、湿度、など無関連な要因によって喚起のレベルが高まっているような場合には、「自己愛的激怒」がより顕著な形で生起しやすくなると予測される。もちろん、喚起は他の数多くの情動的心象と連合しているので、単独で怒りに関連した心象だけを活性化するわけではない。それゆえ喚起が高まると無条件に「自己愛的激怒」が起こるのではなく、状況的な要因が必要である。

さらに、活性化拡散による情動の強化は無意識的に行われるということが重要である。通常の個人においても、いつもなら怒らないような状況で突然激しい怒りを経験することがあるが、自己愛的個人においてはそれが極端で顕著であることが知られている。こうした現象も、上記の考え方である程度理解する

ことができよう。このように、自己愛の人格における特徴的な怒りのパターンにおいては、生理的喚起が特別な仕方がかかわっている可能性が指摘できる。

これらの問題について検討し、生理的喚起が自己愛という人格特性と結び付いた怒り及び攻撃的行動に及ぼす効果についての知見を得るため、欲求不満物語を用いた例話法実験を行った。

## 方 法

**被験者** 大学生120名（男子60名、女子60名）が実験に参加し、欲求不満物語の種類によって設定された4つの実験群にランダムにわりふられた。各群における男女の比率は一定であった。

**手続き** 実験は、被験者の喚起レベルの測定と質問紙への記入という2段階からなっていた。実験室に到着した被験者に、まず非効き腕の手掌部と下腕部に電極を装着し、電位法によってSPR（皮膚電気反射）を3分間測定した。これが各被験者の喚起レベルの指標となる。その後、別の研究という名目で質問紙に記入を求めた。

**質問紙の構成** 質問紙は、自己愛人格目録日本語版（佐方, 1986; 大平, 1989）と4つの欲求不満物語のうちのどれか一つからなっていた。これらの物語では、主人公が友人との待ち合わせで2時間待たされ、結局相手は現われなかったという欲求不満状況が示された（物語の作成については大淵（1982）を参照した）。この状況（被害）は各物語で共通であるが、相手（加害者）の動機・意図が「過失（待ち合わせをすっかり忘れた）」「利他的動機（急病人を病院へ連れていった）」「故意（行く気がしなくなった）」「事故（来る途中で事故にあった）」の4種類で操作されていた。被験者は、これらの状況において自分が主人公の立場であったら感じるであろう怒りの程度、行うであろう言語的攻撃（相手を責めたりなじったりすること）の程度、主観的な被害の程度、相手の責任の程度、をそれぞれ10段階

で評定した。また、予備的項目として、自覚された喚起の程度と喚起の原因帰属についても評定させた。

## 結果及び考察

**喚起、自己愛、動機・意図が怒り・攻撃に及ぼす効果** 各物語ごとに、質問紙記入前3分間におけるSPR自発反射頻度によって、被験者を高喚起群、低喚起群に2分割した。また、自己愛人格目録の得点によって、高自己愛群と低自己愛群に2分割した。怒り、言語的攻撃、被害、相手の責任の各評定値を従属変数とし、それぞれ喚起（2水準）、自己愛（2水準）、物語（4水準）を独立変数として3要因の分散分析を行った。

その結果、怒りについては、すべての主効果と自己愛と喚起の交互作用、自己愛と物語の交互作用が有意であった（ $F=7.54, p<.05$  ;  $F=3.61, p<.05$  ;  $F=35.21, p<.001$  ;  $F=6.28, p<.05$  ;  $F=3.48, p<.05$ ）。言語的攻撃についても、すべての主効果と自己愛と喚起の交互作用が有意、またはその傾向にあることが明らかとなった（ $F=3.27, p<.10$  ;  $F=3.21, p<.10$  ;  $F=22.75, p<.001$  ;  $F=4.95, p<.05$ ）。受けた被害の主観的評定と相手の責任の程度に関しては、いずれの要因も有意な影響を及ぼしてはいなかった。

Table 1, Table 2に、各群における怒りと言語的攻撃の評定値の平均を示した。分散分析の結果とともにこれを解釈すると、次のように述べることができる。すなわち、自己愛的傾向が強い個人ほど、欲求不満状況においてより強い怒りを生起しやすく、これにともなって強い攻撃的行動をとりやすく、このような傾向は生理的喚起のレベルが高まっている

Table 1 怒りの評定値の平均

	物 語								
	過失		利他的動機		故意		事故		
自己愛	高	低	高	低	高	低	高	低	
喚起	高	6.75	8.80	6.63	3.67	9.20	9.10	5.71	5.00
低	8.50	7.22	6.00	3.17	9.17	7.86	5.36	3.25	

数字が大きいほど、怒りの程度が強いことを示す。

Table 2 言語的攻撃の評定値の平均

	自己愛	物 語							
		過失		利他的動機		故意		事故	
	高	低	高	低	高	低	高	低	
喚起	高	6.75	4.33	3.38	2.83	5.24	4.72	3.86	3.86
	低	6.60	6.25	3.17	1.67	4.78	3.77	2.91	2.50

数字が大きいほど、攻撃の程度が強いことを示す。

るときにはさらに促進される。また、生理的喚起はそれ自体で怒りや攻撃を促進する効果を持つ。さらに物語の種類の効果から、従来から主張されてきたように(大淵, 1982), 加害者の動機が故意や過失であった場合には怒り・攻撃の程度は強くなることが明らかになった。

**自己愛と怒り・攻撃の相関** 次に、各物語ごとに、高喚起群と低喚起群それぞれにおいて自己愛人格得点と怒り、言語的攻撃、被害、相手の責任の各評定値との相関を算出した。このうち、怒りと言語的攻撃についての結果をTable 3, Table 4に示した。怒りについては、高喚起群ではすべての物語において自己愛人格得点との間に高い正の相関が得られている。これに対し低喚起群では事故の物語についてのみ相関があり、過失、故意では無相関、利他的動機では負の相関が得られている。言語的攻撃についても、同様に高喚起群のみにおいて有意な正の相関が得られた。なお、被害と責任については有意な相関は得られなかった。

この結果から、生理的喚起のレベルが高い場合、自己愛的傾向の強い個人はより強いレベルの怒りを感じ、攻撃的行動を生起させやすいということが明らかになった。

Table 3 「怒り」と自己愛人格得点との相関

	過失	利他的動機	故意	事故
喚起低	—	-.52*	—	.67**
喚起高	.62*	.43*	.56*	.56*

\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$

Table 4 「言語的攻撃」と自己愛人格得点との相関

	過失	利他的動機	故意	事故
喚起低	—	—	—	—
喚起高	—	.62**	.66**	.66**

\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$

## 討 論

本研究において、加害者の動機・意図、喚起の程度、自己愛的傾向の強さという3つの要因は、すべて怒りと攻撃的行動の強度に影響するということが示唆された。

大平(1988)は、自己愛傾向が強い個人は加害者の動機や意図にかかわらず、一般的に強い怒りを感じ、強い攻撃を行うということを示唆した。一般の個人では、加害者の動機や意図を推測し、それによって怒りや攻撃の強さが影響を受けるという過程がみられるが、自己愛的個人ではそうした過程の働きが比較的弱いと考えられた。この知見は、喚起の影響を除いて考えると、本研究においても支持されているといえる。たしてさらに本研究の結果は、こうした傾向は自己愛的個人が喚起状態にあるときに特に顕著に表れることを示唆しているといえよう。

また、分散分析において喚起の主効果はそれ自体有効であったことから、一般の個人においても生理的喚起の高まりは攻撃的傾向を促進するといえよう。これは、Clark(1982)やBerkowitzら(1989)の知見と整合している。ただ、喚起の促進力の強さは、自己愛的な個人においてより強いということが明らかになり、情動における人格的要因には、心象として記憶に蓄えられた喚起が影響を与えている可能性がみいだされた。このように、本研究で得られた結果は、喚起機能についての認知的心理学的な理論的枠組みと整合するものであった。

しかしながら、本研究で得られた知見について、代替説明が存在することを指摘せねばならない。そのひとつは古典的な動因論的説明である。Zajonc(1965)によれば、一般的な動因の覚醒は、優勢な(dominant)反応の生起率を高めることが主張されている。自己愛的傾向の強い個人は欲求不満の状況においては怒りや攻撃的行動が優勢な反応であると考えられるため、高い喚起はそれを促進したと考えることができる。もうひとつSchachter流の喚起の原因帰属を軸にした説明をあげる

ことができる。すなわち、個人は自己の喚起が高まったことを自覚し、その原因として欲求不満状況を探索した。その結果より喚起が大きい個人は、自己をより強い怒りの状態であると知覚した、というものである。

予備的研究という性格上、本研究の知見は単独で動因論的説明を排除することは困難であろうと思われる。ただし、動因論的説明は認知や思考のあり方を説明するには適してはいない。本研究が基盤とする認知論的説明はこれらの領域をも説明可能であることが長所である。今後、喚起が怒りに関連した思考や認知に及ぼす影響についての知見を蓄積することで、認知論的説明の妥当性をより詳細に検討していく必要があるだろう。

帰属論的説明に関しては、本研究において反証が得られている。本研究ではSPRによる生理的指標と被験者の喚起の自己評価の指標の間には相関がみられなかった。すなわち、本研究の被験者は、自分が喚起の状態にあることをそれほど自覚していなかったということができる。帰属的説明は、まず喚起状態の自覚を要件とすることは自明であるため、この説明は受け入れがたい。実際、Schachterがというような、自己が喚起状態にあり、それを自覚していて、しかもその原因が明確でない場合というのは、現実場面ではむしろまれなことであるといわざるをえない。また、本研究では自己の生理的状態の原因帰属の指標についても評定を求めているが、これについては群間でまったく差がみられなかった。こうしたことから帰属論的説明は排除可能だと主張することができる。

本研究の知見は、限られたものであり、過度な一般化はひかえねばならないであろう。しかし、自己愛人格という人格的要因が情動や行動に影響を及ぼす際に、生理的な喚起というものが媒介的に働いている可能性は示唆されたと考えられる。今後、他の人格的要因についても同様な結果が得られるかについて検討し、より一般的な知見を得ていくことが必要である。

## 引用文献

- Berkowitz, L. & Heimer, K. 1989  
On the construction of the anger experience: Aversive events and negative priming in the formation of feelings.  
In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology*, vol.22.  
New York, Academic press.
- Clark, M. S. 1982  
A role for arousal in the link between feeling states, judgments, and behavior.  
In M. S. Clark & S. T. Fiske (Eds.) *Affect and Cognition*. Hillsdale, New Jersey.
- Collins, A. M. & Loftus, E. F. 1975  
A spreading activation theory of semantic processing. *Psychological Review*, 82, 407-452.
- Izard, C. E. 1982  
Comments on emotion and cognition: Can there be a working relationship?  
In M. S. Clark & S. T. Fiske (Eds.) *Affect and Cognition*. Hillsdale, New Jersey.
- 中西伸男・佐方哲彦 1986 ナルズム時代の人間学 福村出版。
- 大淵憲一 1982 欲求不満の原因帰属と攻撃反応 実験社会心理学研究 21-2 175-179.
- 大平英樹 1988a 自己愛人格にみられる怒り・攻撃の特徴的パターン 日本社会心理学会第29回大会発表論文集 172-173.
- 大平英樹 1988b 攻撃行研究における生理的喚起の位置づけについて 人間科学研究 10 1-14.
- 大平英樹 1989 自己愛人格と家族関係に関する実証的研究 家族心理学研究 3-1 1-10.
- 佐方哲彦 1986 自己愛人格の心理測定 — 自己愛人格目録(NPI)の開発 — 和歌山県立医科大学進学過程紀要 16 77-86.
- Zajonc, R. B. 1965  
Social facilitation. *Science*, 1965, 149, 269-274.